富山・井口城（いのくちじょう）跡

1　所在地　富山県南砺市池尻・久保
2　調査期間　一九八九年（平1）九月～一二月
3　発掘機関　井口村教育委員会・富山県埋蔵文化財センター
4　調査担当者　上野　章・押川恵子
5　遺跡の種類　城館跡
6　遺跡の年代　縄文時代、奈良時代～中世
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

井口城は小矢部川の支流である赤祖父川の左岸、標高一〇八～一一〇mの水田中に位置する。『宝暦十四年砺波郡書上申帳』には、その規模が東西約五〇間、南北約三〇間の土居と幅三～四間の堀跡と記され、当時既に田畠となっていた。

今回の調査は、城跡を東西に通る道路の拡幅工事に伴い長さ一五〇m幅約一〇mを発掘し、掘立柱建物一、堀五、溝五、井戸二、井戸状の素掘り穴二二の遺構を検出した。城の東側では方形単郭の主郭に出丸が付き、この出丸をめぐる堀（溝）を検出した。底面出土の遺物から、一五世紀後半に掘られた堀とみられる。

（城　端）

主郭中程の溝SD〇五は上端幅約九m下端幅約六m深さ二・四mの大溝で、底面近くから卒塔婆一点が出土した。他に溝内から一五世紀後半の土師質小皿・珠洲焼や、編物錘などの木製品が出ている。

SD〇五を埋めた後に掘り込まれた井戸SE〇一は、一・四m×一・二m深さ〇・八mの方形で、四隅に柱を立てて縦板を間にめぐらし横桟で留めた形態である。井戸内には人頭大の石を入れ込んでいる。底面からは木簡二点と、赤漆の付いた箆・箸状木製品や小型の曲物、土師質小皿、梅・桃の種子などが検出され、土器から一五世紀後半の所産とみなされる。

8　木簡の釈文・内容

SD〇五

(1)　「〈（オン）ボタマイタリバサラ）□（ウン）〔カカ〕」　153×21×07　061

SE〇一

(2)　「（オン）ボタマイタ）□」　262×29×04　061

(3)　「（オン）ボタ）□」　212×29×09　061

(1)は上端部を圭頭状にし、左右両側に切り込みを二段入れ、下端部を削り尖らせている。(1)のオンは帰命、ボダは仏、マイタリ「シャ」とすれば摩多羅神となり中世天台系で信仰された神とされる。またバザラは金剛であり、それがラジャとなれば「王」の意味で金剛神を表している。

(2)は(1)と同じくオンボタマイタで始まり、(3)も始まりがオンバであり、中程から下部の梵字が不明であるが、最後の句点で終わる。内容がはっきりしないが、(1)と類似した内容であった可能性もある。溝や井戸を埋めるに際し、卒塔婆や木簡に決まった内容の梵字を記していたことも想定される。

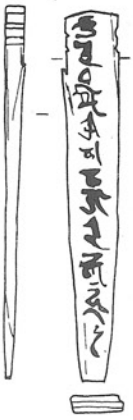
なお、参考として類似した梵字が多く書かれたものに、宝菩薩真言があり、「 (オンボダシャリラバザラウンラタンナウオン)」の傍線部が類似している。

これらの梵字の釈文や類似例については、真言宗安居寺の大谷龍寶・大谷龍祐氏にご教示をいただいた。

9 関係文献

富山県井口村教育委員会『井口城跡発掘調査概要』(一九九〇年)

(上野　章)



(1)

(3)

(2)

(1)

(3)

(2)